

殿 由 2197^p → 560,59⑥
玄室 由 2219-1/4^p 記(黒)37^p

み、227^p

頻りに にか多いからやx

かんき 486^p

一方、陰ほとの中からきこ聞えてくる天兒屋命あまのこやねのみことのうめ呻くようなかんき歡喜のこえ声があひ合図すになっうごていたのいちたえと速はやくなっトルた。

そして、

「ボウボウ」

「ボウボウ」

と唱和しょうわする男達おんどうの音声おんこゝろは郷音ひなき渡りわたり、かと思わ

れるばかりにまえ前へ後うしろへと忙せわしくなく打ち振ふら小

る松明たいまつから飛び散ちった火ひの粉こなが二列にれつのなっを男

達たちの上に真赤ましかな糸いとを引ひいてみだ水落みづおちた。

そんな中なかを、意美志留おみしるはか駆け抜ぬけるように

て元来もとよりた方ほうへもど戻もどっていった。

・日の御子みこを、殿どの(玄室げんしつ)の内うちへ御案内ご案内する

為ためだあった。(「古事記」黄泉国よみのくに訪問条ごうもんじょうへ殿どの

参照)

↑↑↑↑

あつたろうか。

原稿

改行 元強 「めやか」 は、ほめて

2233 P

腰にかけ 319 560, 5, 10 5 2235 15 2231 2, 2228 P

● 最初の女は鏡を持ち、次の女は珠襦（玉を

また やや遅れて、 幾人かの女達

火の色を映して無気味に輝く銚を下げた。その

その後方に、二、三人の男達がつき従って

静かに静かに、運んでくるのだった。

た。屈強な二人の男が、日御子の眠る棺の前

留に先導され、一歩一歩、ゆっくり歩む意美志

た。き満たした酒甕が、大事そうに抱えられてい

と歩を進めてくる意美志留の姿が見えた。

に脈動する火の管の基部の方に、いま一度、そろりそろり

やがて、二列に連なり、うねるよう

かたみ 元423^p 曲玉 2066^p 管玉 元628^p
開多見 死んだ人を 見たいと云ふ 意。
曲玉 トル

2.229^p

こと

短衣 元293^p
短衣 大の短い衣服

紀下293^p 22

貫いて飾りとした短衣をささげ持ち、そして最後の女は玉飾りのついた小箱を胸に抱きしめていた。
*因みに述べると下記すと、孝徳天皇紀大化二年（六四六）三月二十二日条に、
「中国の君主は、玉襦（珠を飾った短い衣）や玉押（珠玉の飾箱）等の副葬を禁じた」といい、これにならって薄葬令が出された、と述べている。
それでは、玉飾りのついた美しい小箱の中に一体何が入っていたのだろうか。
化粧道具一式であったろうとも思われる。
・あるいは、真珠や、勾玉や、管玉などの装飾品が入れてあったのだろうか。
・もしかしたら、ある。梯儻の形見と云うべき。あの口金印が、おさめられていたのかも知れない。
・しかし、その玉押に、何が入れられていたのか、知る術はない。
*

いわゆる 163^p (主 788^p - 1/2

松下見林 2083^p

2,230^p - 1/2

こと

改正

電② 収納 金品をおさめいれること
収載 納付

とに副葬されたと思われ。 掘り出した可能性が大きいようである。 江戸中期の儒者・国学者である松下見林の 前王廟陵記に、 神功皇后陵の石棺は、その当時露出して いた。 痛ましい様子。 ということがいさされていゝのである。(「古 墳の発掘」森浩一、二四頁参照) 人魏志倭人伝の記事中に記されている。 親魏倭王の金印が、神功皇后個人の墓 にも副葬されたと思われ。 ① 後代にこの古墳内にあった数多くの 物が、平城宮西北方の神功皇后陵へ移され たことである。 ところか、その神功皇后陵中のものも、盗 ① というのは、後代にこの古墳内にあった数多くの 物が、平城宮西北方の神功皇后陵へ移され たことである。 ところか、その神功皇后陵中のものも、盗 ① というのは、後代にこの古墳内にあった数多くの 物が、平城宮西北方の神功皇后陵へ移され たことである。 ところか、その神功皇后陵中のものも、盗

まぐ 危惧 520

日本の「史」② 飛鳥と奈良
読売 163
大蔵 2218
小蔵 964

漢委奴王
日本の「史」(1) 読売 114

り 得ない
2,230^{P-3}/₂

本来の日本の真実の歴史を露見させる切掛

になりかねないと危惧され、多くの物と共に金

印も止むなく世の中から抹消された

のではなからうか

単なる推測ながら、この金印は、他の金製

品とともに、聖武天皇の詔勅によって

造立された盧舎那仏(天照大神)の身を飾る

金、金の材料の一部とされてしまった可能性も

ある

とはいえ、親魏倭王の金印とは、ほぼ同様

あるいは漢委奴國王の金印とほぼ同様

全く予想もし得ない所から出土するかも

知れない。

いずれにせよ、金印の行方については、誰も知

ることの出来ない謎となつてしまつた。

*

脈動するかのよう打ち振られてゐる松明

の光の管の中を歩いてゆく娘達は、黄泉の国

で日の御子の身の回りの御世話をするように

rel! 2228

2.231P

2224 249
2228 249
2229 249

とくに
特に

選えらば小たのだった。

うらわかかいこらの女達は、声こゑをあげて泣なき

なから、行いきまどい、あるいは立たちつくした

涙なみだを流ながし続つづけた。

とはいえ、悲かなしくも哀あれをささそうその泣なき

声こゑは、日御子の送葬そうそうの時に当あたって相あ応おしいも

のであった。

「女王いみぎみの野辺のべ送りおくりを嘆なげき悲かなしんで、あの女

達は泣ないてゐるのだ

見守みまもる者達も皆みな、真赤ましかに眼めを泣なき腫はらひ、

今はもはや外聞がいぶんもなく、日御子ひのみこを慕もいおん

おんと涙なみだいていた。

松明たいまつの中なかを行いく女達のすぐ後うしろには、数人すうにんの

青ざめた男達の姿すがたがあった。

煌きらびやかな武具ぶぐに身みを固かため、弓ゆみ・鞍ゆき・鉾ほこ・

刀かたななどを手てにたその武者達むしゃは、常夜とこよの国くにで

日ひ御子みこを大切たいせつに守護しゅごするようにな、と命めいぜら

れていた。

2228
武人ぶじん

*

ぬるりと1719^p
ぬるりと1718^p

2,232^p

リーどう小村374^p
律動云2315^p 力士像 1790^p
野郎154^p 2211^p

みとのまぐはみ
夫婦え理 凡そ記472^p
脈打つ云2133^p

時^{とき}が^い迫^{せま}つてきた。
盛^{さか}り^{さか}と^{さか}腰^{こし}を^{うご}動^{うご}かし、
青^{あお}筋^{すい}を^{たて}たてて^{さけ}叫^{さけ}び^{つづ}つ^けけ
た。
男^{おとこ}達^{たち}の^{さやう}左^{ひだり}右^{みぎ}の^{ひざ}膝^まに^ま卷^まき^つつ^けら^う小^こた^た輪^わが、
つ^もず^らり^と連^つら^なつ^て律^{りつ}動^{どう}的^{てき}に^{うご}動^{うご}き、^{けつ}血^{かん}管^{くわん}
が^お大^おき^く脈^{みやく}打^うつ^てい^るか^のよ^うで^あつ^た。
その急^{きやう}遽^{なう}子^しの^{うご}動^{うご}き^{ゆえ}故^{ゆえ}に、男^{おとこ}た^ちの
身^み体^{たい}中^{ちゆう}か^らぬ^ると^{たい}大^{たい}量^{りやう}の^{あせ}汗^{あせ}が^ふ噴^ふき^だ出^だ
し、^や躍^{やく}動^{どう}した。
こ^うう^いち^{だん}て、男^{おとこ}神^{かみ}で^ある^あ火^あ男^{おとこ}は^{この}時^{とき}と^はか
り^に一^い段^{だん}と^は激^{げき}しく^あ燃^もえ^あ上^あり、^{ほの}火^あの^う乱^{らん}舞^ぶが^よ夜^よ空^{そら}
を^あ焦^{あせ}が^した。
ま^さに^あ火^あの^{さい}祭^{さい}典^{てん}と^よ呼^よぶ^べき、^か華^わ麗^{れい}の
上^うも^ない^ぎ儀^ぎ式^{しき}で^あつ^た。

*

月 2186'

2,233^P

2228^末

意美志留は、もうすでに陰の中へ消えてしまっていた。

引き続き、安らかに眠る。女王もまた、静かに、滑るように陰の内へ

入ってゆかれた。だが、哀れなのは、女王曰御子に従ってゆ

く女達であつた。それ、それ、鏡や珠襦や玉、
押しつけかり手に握り、めま、陰の前

で入り惑つた。もはやその目に光はなく、青い唇が細かく震えていた。

女達のある者は、足がすくんだかのように立ち止つて天を仰いでおり、そしてある者は力無くその場にへなへなとくずおれ、泣き伏

ていた。

女達の後方につづく男達も、己の死を目の前にして、さすか、不安の色を隠し、うもなかつた。それは、目の前でひとかたまりにな

2228 左

ほむら 2048

2234

もすろ 裳裾 2189

つか 掴む 1476

リ、放^{ほうしん}べーている女共^{ども}を哀^{あは}れに思うの^でだ
 うか、その手をとって歩^{ある}かせようとするのだ
 った。
 ーかしもう、女達^{おんなたち}には、歩^{ある}く氣力^{きりよく}さえ残^{のこ}つ
 てい^なかった。
 ーかたなく、男達^{おとこたち}はそれぞれ娘^{むすめ}らを肩^{かた}に抱^か
 まらせ、あるいは背負^{せお}いつつ、穴^{あな}の内^{うち}へ向^{むか}
 った。
 ー面^{おもて}を伏^ふせ、目^めを瞑^{つぶ}って入^{はい}っていつ
 た。
 ー陰^{かげ}の前^{まえ}には、残^{のこ}さした女^{おんな}がただ一人、
 ていた。その髪^{かみ}は乱^{みだ}れ、裳裾^{もすろ}ははらりと揺^ゆ
 ており、腰^{こし}が揺^ゆれる火炎^{えん}に照^てらされてい^た。
 女^{おんな}は、声^{こゑ}もな^なく泣^ないてい^た。
 ーその時^{とき}、かっ^ちりした手^てが、優^{やさ}しく女^{おんな}の手^て
 を取^とった。
 ーさあ、私^{わたし}の方^{ほう}においで。私^{わたし}が、この胸^{むね}に
 抱^だいていつ^{いつ}かあげよう。
 男^{おとこ}は、片膝^{かたひざ}をついて助^{たす}け起^{おこ}し、女^{おんな}をひくと
 抱^だきしめ、立^たち上^{あか}った。
 ー日^ひ御子^{みこ}に従^{したが}っていつ^{いつ}か護衛^{ごゑ}兵^{へい}

④ $2231^{p-2/2}$ 胸心 $2231^{p-2/2}$

12

きょくち 極致 582^P せきん 堰 1235^P

2.236^P - 1/3

れいえき 小枝 電液 1045^P

ゆ 行く 2255^P
「行くぞ」

から 柵を激しく打ち振っていたが、
突然、その柵を「つかり」と両手に握りしめた
まま、頭を地にこすり付けるかのように拝み
伏し、大声で叫んだ。
「行きますぞ」
ここに意美志留は、手にしていた白酒を、
柵めがけて力強く、思いっきりふりかけた。
その霊液は、勢い余って、殿の奥深くにま
でも迸った。
それは、火男の射精の始まりだった。
そして、白酒が柵に向って放出されたのと
同時に、天兒屋命の喘の声は堰を切ったよう
な叫び声に変った。
「アアッ。ああ。ああ。――」
感極まった極致のその声は、長く長く屋を
引いて、あたりに轟き渡り、――山の神を
も奮い起さずに「おかないほど」陰の内に
反響した。
頂点を極めた火男の壮絶な喜びの声は、
つまでもいつまでも、いつ果てるとも知れず

2220-1/2 ^{かたづ} 固唾 元 420^p
唾 元 1495

2,236^p-2/3

^{つば} 唾 元 1725^p 火唾 大カン 小カン
大カン 384^p ツ、ダ、ダ、ツバ、ツバキ
H13.1.15.④ 日本各地の
なれ。 索引にも無し
精水 元 1224^p
精水

うめくように続いていった。
とくに参考迄に述べると、
「精液は、別名がたぐさんあって、火唾(ほづ)①
保豆、淫、淫水、シナタリ、腎水、気水、蜜の香
精水などとも呼ばれている」
という。(「建設の安全」建設業労働災害防
止協会、平成十三年一月号、元労働省診療所
所長横江康夫「健康管理コーナー」参照)
つまり、口精液とは、口火唾とも
称されてゐる、という。
火唾の口唾は、「固唾を呑む」という時
の唾と同じく、「唾」の意である。
もしかしたら、口火唾とは、「火男の唾
という意味なのか」知らない。
先述の「たぐさん」ように、口阿亀・火男和合の
様子を、上空の高い位置から見おろしたら、
「見ようによつては、
ハ口おかめ口の口の方へ、口ひよつとこ
の口が長く伸びてゐるところ」
と解釈できそうだが、
(第三十四章入懷

2,236^p-3/3

こと

懐妊の儀式 2207^p
ひよと 2219^p-4/4

妊の儀式✓
第 317 図 参照
ひよとニの項において既

・そうーためけで、

へ火男の口から放出されるようにも解さ

得る口白濁色の液体のこを、口火唾と

呼ぶことがあるのだろう✓

と観察される。

*

575

こと

809x

2237-1/2

8んせつ 閑絶 2235 末 2110 身籠る 2110 絶叫 小 157 玄室 2219-1/4 末 2227 殿 2197 2227

絶叫が続く

火男のいてる間に、日御子は女人の形をした
塚の腹中の殿（玄室）の内に安置され、身籠

った。

すなわち、日御子は、身をひそめて隠れこ

もった。

なお、身籠るという言葉には、

①妊娠する。懐妊する。

②身をひそめて隠れこもる。

という二つの意味があるという。（「広辞苑」参照）

※先刻から

一方、陰の入口の方では、天兒屋命の悶絶

の声に呼応して、耳を劈かんばかりの悲鳴

が次々に起こっていた。

「キャー」

というようにも聞えたが、いかゞそれは山の

神の煩悶の声にほかならなかつた。

女も男も隠し持たれていた縄で首を絞められ

殉死させられたのだった。

こうして、次から次へと、苦痛にあ

えぐかのような歓喜の聲が、湧き起るように

2,237^P - 2/2

ひと 2235^P 497
愛(い) 小林 399^P
うにめく 182^P

シズミ 2234^P 215
護衛兵 2228^P 167
2209^P 右頁

続いっていった。
■天石窟(塚の女陰)の前のあの火の列は、
今はもう、あらん限りの最後の渾身の力を振
り絞って、くねくねとたたうっていた。
・皆が皆、~~力~~すでに半狂乱の中にうごめい
ていた。
トルこんな只中であって、先ほどのあの男は、愛と
い女を胸に~~ひ~~かりと抱え込んだまま、陰
の入口あたりでただ呆然と立ちつくしていた。
た。
とはいえ、この女の運命は定まっていた。
誰かがその女の手から小箱を取りあげ、そ
して誰かが女の首に縄をかけた。
こうして女は、男の腕の中で死んだ。
「ああ、――私の最愛の人よ。私を置い
ていッてしまうのか」
■男は、ぐったりと~~胸~~に~~倚~~りかかっていた。
るその女を哀れみ、そーてまた~~心~~は~~り~~裂け
るほどの過酷な立場に立たされた。己の不運を
歎いて、――自らも舌を噛み切り、若い生

護衛兵

→ 44.2.28
40巻 〇C石修
今のは際 云150P
2.238^P

命を断った。
二人は抱き合ったまま、崩れるように大地に倒れた。

米

その時、
馳せ参つて来る者があつた。
たいまつ
松明の火の列の間を、通つて

「私も、日御子の御子のお供をして死にとうござ

女は叫んだ。
燃え盛る火焰の筒を、一気に走り抜けながら

「どうか私を殉わせてください
陰の内にかけ入った女の、殉死の望み
は叶えられ、夜の静寂の中に、さうにま
た一際鮮烈な、山の神の悶え、戦慄く声、が響きこ

「そして、その女の、今わの際の悲鳴は、

火男の前に群れた人々の心の内に、異常なまでの、狂気に満ちた興奮を呼び起こした。

「私も、私も殺してください」

「私も死にとうございます」

「日御子の居られない真暗な世の中にな

ど生き存らえて、何になりましよう。私もお

供にたします

それは今まで抑えに抑えていたものを、一

気に解き放とうとするかのように、だた

↑↑↑↑心高ぶり、耐え難い苦渋の内に、

人々は、ただ一途に日御子を目に、

遂げようとして、我も我もと一目散に穴の内

を、目指した。火の列の間を駆け抜けてゆく者もあつたが、

しかし、もはや大方はそんなことに構わ

い、いきなり穴の入口へ押し寄せ、

こうして、あまりにも大勢の者達が一時に

どつと群れ集まってきた為、陰の前は押合

合の揉み潰れた状態となつてしまひ、火の列も

水に散れ、散り散りになつてしまつた。

もつとも、望み通り殉死し得たのは一人

二人だけで、他の者は皆、涙を飲んで思ひ止

不本意ながらも

おかし 拝む 580.5.21
元 286
紀上 330P
改行
トU
敬虔 672
やまいつつむと

宙 2206P
よみかえろ
元 2289P
英島口からかえろ
2,240P

またえ
元 2189P

こば
元 824P

かんきよう
元 487P
元 2211P

まつた。
頑強な男達が、その身をもつて穴の入口を
塞ぎ、人々の死を拒んだからであつた。
哀水にも、熱い想いを遂げ得なかつた者達
は、髪を振り乱しながら号泣し、
子の塚に縋り付いてもだえた。そして、
声をこらし、口々に叫びた。
「日の御子よ。あなた様の御世に、私達は
辛せでした。本当に楽しい毎日でした。いま
た。けれども今は素戔嗚尊の御世となつて、暗
く侘しい日々が続いております。悲しいこと
ばかりが打ちつづく、辛い世の中となつてい
ます。
「早く、一日も早く、黄泉の国から甦つて
下さい。」「広辞苑」へ「甦る」参照
「どうかもう一度、あの仕合で豊かな日々
を、この世に齎して頂きとうございます」
陰のまわりは、黒山の人人で埋まるはか
りであつた。
皆、日御子の塚に向つて敬虔に拝み伏し、
「慈み深く御心の広かつた女王の再来を
と心から祈つた。

24
元 2228P
1099

ヤ
むか
その身を挺する
ぬき出てはむこと

はが 激 (い) 2239 1987
よしろう 2292

そうかん 小林 1037
雙眼

2.24/ 573

「今に見せろ」

こうして、火男と口おめとは
深く結ばれ、完全にぴったり寄り添い、
愛情を分かち合いつづけた。

*

しかし、この激しい興奮の渦の真只中であ
って、素戔鳴尊の苛立ちは募っていった。
ギラギラ輝く雙眼には、飛び交う無数の松明
の炎が揺れていて、その凄まじいばかりの

憤怒の形相は、側近の者達さえも疎ま
せ、もうほどであつた。

「そうか。そんなにまでもこの俺が憎いか。
そして、そんなにまでも日の御子に殉
のか。ようし、いまに見ておれ」

素戔鳴尊は唸った。

素戔鳴尊は、出来ることなら、
日の御子の再来を約束するような儀式など、

権力でもって止めさせたかった。そ
うして、儀式に熱中している者達など、
蹴散らして

懐妊の

せんどうえ 119
美道 1272 暫 1006
あまのいはや
ミコ 2209

2,242^P

いた 元 119^P
悼む人の心と悲しみは 888^P (それとて)

いまいたかつた。

さーもの素多鳴尊にも、手出しは

出来なかつた。師の死を悼むのはいわば弟と

しての務めであり、その仕来に抗するのは、

身の破滅をも意味していたからであつた。

煮え滾るばかりの熱い血が頭にのぼりつめ

つくるのを、辛うじて押しとどめた素多鳴尊

は、八束鬚を震わせ、凄まじい鋭い眼つきで

あたりをギョロギョロ眺めまわっていたが、

やかて、火男と山の神の間にすくと突

つ立ち下、やおら陰の方へ向かつてゆつくり歩

いていった。

死者と、決別する為であつた。

＊

天石窟（美次道）の奥の口殿（玄室）の内

で暫く安らかな眠りにつかした女王日御子

の回りには、刀剣・弓・矢・鏡・珠襦・

玉押などの貴重な品々が、整然と置かれていた。

くに配されていった。

正

2.243^P

1400セン 1060^P
肅然 おころかなさ
かにかるさ

1100^P
2.243^P
せま 狭(1254^P)

記(五) 37^P
原の藤戸 2019^P 1/6

郷土資料事典(29)奈良県 人文社 一九九七年一月一日発行 二六頁

さらけに又、火の脈動する火の管を通って
引きもきらずドック・ドック・ドックと
次から次へ送り込まれてきた種々の供物が
高杉武の土器類に山盛りと盛られ、ところ
狭しと並べられていた。(昭和六十年三月十
三日付朝日新聞「檀考研博物館の牧野左墳横
穴式石室をもつ円墳」出土の遺物展等参照)
武具を身に纏った男達は皆、横穴の外に運び出
され、あちかち女王にお仕えするかのよう
に、肅然と横たえられた。
尚、奈良県平群町の鳥土塚古墳に於ては、
義道部の閉塞石内側に円筒形の埴輪、外側に
人物等の埴輪が置かれていたという。(「埴輪」
伊達宗泰、保育社、一四頁参照)
殉死した若武者の母親であらうか、いまは
もうすでに骸となつてしまつてゐる男を
抱きかかえ、声を限りに泣いてゐる老婆の
姿があった。

陽物の

ひつぎ
棺 1871^p

1世
視録 974^p

せんとう
羨道 1272^p
巨川 2225^p

たどる
立ち止る 1378^p

2,244^p
2242^p 8-9^p

素多鳴尊は、天石窟（女陰）の入口で立ち止ったが、一かへすぐその穴の奥を指し、陰の内には、巨川があった。羨道の中は、もうすてはコシンと静まり返っており、奥へ奥へと踏み入ってゆく素多鳴尊の荒々しい足音だけが、妙に尾を引いて反響した。

うむ。ここだなし

素多鳴尊は、棺のかたわらへやってくると、その大きな手を、一眠するように横たわっている姉、日御子の手の上に置いた。

素多鳴尊の胸の内に、今は亡き人の思い出が駆け巡って、一瞬のことで、一かなった。

和馬台国に君臨する男王素多鳴尊の眼には、再び傲岸な、猛猛しい光が宿っていた。

儀式にのっとり、日御子との訣別をすませ

た素々鳴簞は、もはや振り返りもせず、両肩
を貸やかしく大股で出ていって、
＊

陰の内での務めを果て終えた者達にとつて
も、別れの時となつた。次々に出て行き、燈
火を持つた意美志留も去つていってしまつた。
こうしていはまは、真暗な殿の内に、天兒屋
命ただ一人が留まつていた。

あわれ天兒屋命は、愛しい妻の頭辺（枕も
と）にはらばい、脚辺（脚もと）にはらばい
て号泣し、涙を流して悲しんだ。（神代紀上）

第五段一書第六参照

天兒屋命は、亡き人の髪をまさぐつ

て手にとると、頬を寄せてこうささやいた。

「私の妻よ。可哀相な阿亀よ。私は結局、

貴女のために何をしてあげることが出来たの

だろうか。許しておくれ、

その情景はあたかも、共に語り合つてい

2231^P

紀上92^P 98^P
元(聖)38

2246^P

正始9年12月や我(聖)2207^P
ふくみあがてい 紀上66^P
紀上98^P 紀上92^P

紀上92^P

かのようであつた。(紀)
■やかて天兒屋命は、そつと湯津爪櫛(神聖
な櫛)を取ると、その雄柱(櫛の端の太い歯
の部分)をひきかいて、それに火をつけた。
(神代紀(上)第五段一書第六参照)
■するとそのかすかな光の中に、妻の姿が浮
び上つた。だが、不慣れな下最愛の
妻の身体は、もうすでに、目を疑うばかりの
見るも悲しい姿となつていた。
「ああ、何と痛ましいことよ」
あまのこやねのみこと
■天兒屋命の目には、妻の身体が脹満小あか
つて、その上にいろんな種類の雷公がいるよ
うに見えた。雷公達が、いまにも襲いかかっ
てくるのではないかと思われた。
■剣を抜きはなつた天兒屋命は、背に振りは
らい振りはらいしなから、真暗闇の穴の中を
逃げていった。途中に置かへていた蒲陶(山
葡萄)の蔓を投げ、次に雄柱の欠けた湯津爪
櫛を投げすて、そつとさらに桃の実を採つて
投げつけた。

*

坂路 2226 2225 2226-1/2 249へ
坂路 2226 2225 2226-1/2 249へ
坂路 2226 2225 2226-1/2 249へ
坂路 2226 2225 2226-1/2 249へ

2226 2225 2226-1/2 249へ

2226 2225 2226-1/2 249へ

第六、九参照）
つまり、
へ女人の塚の腹中に宿った日御子は、
と、大樹に向い放屍まうて化成ったものであ
る。（*横穴の中で殉死した時に失禁した尿が低い方へ流れていったのだろう）
巨川を渡り切ると、そこは陰の出口、泉津
平坂（土手）であつた。
土手の外に出た天兒屋命は、女陰の内奥を
振り返つてみた。
いかしなから、追つてくる者は誰もいなか
つた。
と、その時、陰の脇にあつた日千人所引の磐
石と叫ぶ。大岩が動き出し、ついに、そ
の穴の坂路をひたりと塞いでしまつた。
こうして、日火男と日おかめとは結合
を解き放った。ここに天兒屋命は、日千人
所引の磐石の方に向かつて、絶妻之誓（離縁
の呪言）を宣告した。（神代紀上第五段一書
第六、九参照）

とおか
十日 乙1583
2263

(いすえ) 静寂 966 想察 398
398

紀上94.98
437 2,248

電
すくは
サレダビ

紀上94.98
437

天つき
改行

や妻日二代目の神功皇后はなくて、
十月十日ばかり後、新たに生れ出る筈の、三代
目の神功皇后とみなされることになった。
と想察される。
天兒屋命の熱い祈りの声が、
揺蕩うように
静寂の二を流
れてゆく。
千人所引の磐石の前において、天兒屋命は
深々と頭を垂れ、
御子が無事懐妊されますように
と祈った。
その祈りの詞を奏上し終ったとき、
天兒屋命は、手にいた杖を投げた。
杖は、日岐神(祖神・塞の神・道祖神・
猿田彦・陽物神)のことを指すものを象徴するも
のである。(神代紀上、第五段一書第六。同
一書第九参照)
なお、日岐神はもと、根のついた樹木で、
その生成力が豊饒の靈力を示すものとされた
という。(日本書紀上)日本古典文学大系

ちやうど 1463
2206-1/2
2250

2,249P-1/2

つえ かん 1175
よ かん 2045
2236-2/3
小林 516

岩波書店、九四頁、注二参照）
あるいは、
へ陽物神としての役目を果して終えた大樹
（根のついた榊）は、先ず、靈力を除くため
に枝や葉がとりはらわれ、
外において、最後に残った口棒（杖）も投
げ棄てられた✓
というところなのかも知れない。
*ちなみに述べると、
「棒」という字は、口つえと訓む
小林信明、小学館「棒」
という。（漢和辞典参照）
とこので、松明を手にとった裸の男達は、つい先
ごろまでは陰あたり一面にばらけ散っていた
が、いまは再び、元のところへ戻って
二列に並んでいった。
しかし、もはや松明を打ち振る気力も萎えて
しまったようである。――皆、うなだれ、佇立し
ているだけであった。
そして、陰のちかくで、泣き崩れてい
た人々もまた、もとのように火男（火處）の

草みかたに94' 記40'
火處 記上112' 記1825' 精根
3張りめ111はり

5353
輝輝
小林614'

2,249-32
たいない
体力 力249

はえ
這う 1767'

前へ引き返り、最終の儀式の時を待っていた

米

御杖を投げ棄てた天兒屋命は、まるで精根

尽き果てたかのように、ふうふうと火處の方

へ歩いていった。同様

すると、二列に並ぶ火の列もまた、よたよ

たと、火處の方へ歩み寄っていった。

全精力を使い果した裸の男達の中には

まるで這うようにして戻って行く者さえあ

た。気が抜けたように張りもなく、裸の男達

は、今もなお輝輝と夜空を焦がしつつづけて

る火處の間近へやって来ると、手に持った松

明を次々に火男の火焰の中へ投げ入れた。

さく縮んでゆき、火男の陽物は、短く小

さく縮んでゆき、火男の陽物は、短く小

さく縮んでゆき、火男の陽物は、短く小

さく縮んでゆき、火男の陽物は、短く小

前頁6行 最後

天守となることと誓った。
④ 2204P 7行

隋書後 73P 7行

山妻 918P

天守 2206P 1/2
榊 2249P 1/2

2,250P

揺らめく 2263P
志む 130' かいわいかる。大如にお

か手にいていた松明は、一つ残らず全て火男
の体内に吸収されしまった。
火男は、すっかり満足げに、
揺らめかせた。
火は、優しく慈しく、天高く大きく燃える。火男の
しづけた。
山妻は、自分の妻の謙称である。
人々は皆、火男と千人所引の磐石との真中
あたりへ集まってきた。
亡くなった日御子に血の連なる者達は、
白い服を身にまとって、いた。
日御子との別れは、悲しい。
火男は、山の神とかが、
夫婦となり、
かもちった今、
新たに

トル

こ

に日御子が身籠ったのである。

泣くことがあろうか。大いに喜びあい、

祝いあうべきではないか。

と思われた。

この祝言(婚礼)の儀式は、盛大にとり行

なゆめなければならなかった。

なお、隋書倭国伝に、

「男女相悦ぶ者は、即ち婚を爲す」

また、神代紀上第四段本文八国生み条に

「陰陽始めて適合(性交)して、夫婦と爲る

とある。

人々は、歌い、踊り、酒を酌み交して、

悲しみと喜びを共にする者同志、互になぐ

さめあい、日御子の懷妊を祝った。

ただ、肉だけは食って、ならないとさ小

ていたようである。(魏志倭人伝参照)

儀式に關係のない無意味な血を、この祝宴

においてさらに流すことは忌まれたのか、知

小な

歌舞飯酒する人々の賑やかな宴は、こうし

て深更(真夜中)に及んだ。

(*)

2205¹/₂

やみよえ
闇夜 2237^P

2207^P 12月5日の月 2,252^P

アナル

河童 3107^P
3118^P

たまたま えきょう え571
称え 1373 興ず おもしろがる

HV

トル

角力を取り、歌に興じ、踊り狂い、美酒を
称えて酔い、人々の姿は、それはあたが
も、河童の群が、楽しくもの人びりと
世の苦勞など知らぬげに遊びたわむれて
かのようなでもあった。
かし、火男も山の神も、もうすっかり疲
れ切っていた。ただ眠りたかった。安らかな
眠りがほしかった。
火男は、その火勢をおと、次第次
第にその炎を小さくしていった。
白い煙が細くたなびきながら闇夜のかなた
へと流れてゆき、ーやがてついに、火男は
その身を隠した。
まっくらな闇が、あたりを覆いつく
した。
ただ一点。わすかに一つの火種が残さ小た
た。この火種は、御子誕生の時に再び燃え上り
天石窟（女陰）の傍でその一部始終を見守る
ことになる。（神代紀上第七段本又へ火處）
参考。後述）

（＊）

けが 穢れる 683^p

記(2) 40^p 紀上94^p

記(2) 41^p 注6

2,253^p 1/2

記(2) 41^p は冠の神の8
↓

紀上94^p

さて、天兒屋命は、
私は穢れた黄泉国へ行ってきたのだから
御身の禊をしなけねばならない (記)
と言ひ、先ず帯を解いて、
是を長道磐神 (長い道の神) と謂う。
量師の神を投げ棄て、次に衣 (煩神とも和豆
良比能宇斯の神ともいう) を投げ棄て、次に
男子用の股の割れた袴
禪 (道俣の神) を投げ棄て、次に冠 (飽咋え
宇斯の神) を投げ棄て、次に左手の三つの手
纏 (手首に巻く装身具。真珠などで飾られて
いる) を投げ棄て、次に右手の三つの手纏を
投げ棄て、次に履 (道敷神) を投げ棄て、次
に禪 (陽物の頭にかぶせる開嚙神) を投げ棄
てた。 (記 紀参照)
なお、記では、冠の神の名を、
の神、禪の神の名を、
のくに對して、
紀では、禪の神の名を、
日本書

おあい
復 う 元 271
かふせる

コクヨ ケー20 20×20

三國志II 306^P
315^P注27
新文館 45

2.254^P-1/4

42-94^P
104^P

2205^P 12月5日

たのだらう
と推察される。

米

にニに、墓所へ入った者達は皆、天兒屋命
に從つて水中へ入り、その身についた穢を洗い
流した。

神代紀上第五段一書第六には、
「伊弉諾尊、既に還りて、乃ち追ひて悔い

て曰はく、吾前に不須也凶目き
到る。故、吾が身の濁穢を滌ひ去てむと
のたまひて、則ち往きて筑紫の日向の小戸の
橘の境原に至りまゝて、破ぎ除へたまふ。云

とある。

また、魏志倭人伝には、

「**己**に葬れば、**舉**家水中に詣りて澡浴し、
以つて練沐へ一周忌の祭り、**練**祭の時に
う沐浴の意かという」の如くす

（**洗**り清めること）

水 2254^P-3/4
海水とある

と記さ水ている。(「三国志」(四)世界古典文学全集「筑摩書房」三〇六頁、三一五頁注二

七参照)

■察するところ

へ水中に身を沈めて日禊をするという行為は、気温の高い呉・閩越地方に由来している

のだろう✓

と思われる。

■ところが、九州肥後国の冬は、かなり寒

い。

■ 12.5 AM

厳寒の季節に、春から秋までの時期ならともかく、冬の日本列島へ渡来した倭人達か、水の中に入っている身の下に、水を流したの

かどうか✓

に ついては定かでない。

昔からの伝説を守り、冬に寒さをこらえ、水の中に身を沈めて、禊を行なったのであ

ろうか。

(本)

12月5日 12月5日

[illegible]

④ 442^P
2258^P

2,254^P - 4/4

天主改行

改行

さうにもう一つの儀式曰悪阻の儀式曰追加
されたように**想像**される。

尚、**記紀**などから想像すると、古代日本に

おいては、曰受胎の儀式曰悪阻の儀式曰の際

に多くの者達が**殉死**したように思われる。

尚、**会籍**から渡来した倭人社会に当初から

う**殉死**の風習があったのか、それとも**殉死**は

全て**箕子**から**伝**ったのか、そうい

た経緯については**金**々不明である。

また、前方後円墳が倭人社会にとり入ら

れたのか、どの天皇の御世のことであつたのか

も、**明言**出来ない。**又**である。(第三章へ前

方後円墳の系流墓等参照)

*

おどろおどろし
ろくろく 怒ろく

2,255P

2264 1/2 けりの漢大 1月15日 よた 弘
新漢行 307 高平元年 1月 金 2416 弘立つ 2284?
1はいい (249年) (はちやうたつ 司馬仲達 弘 1007? 台頭 弘 1343?)

司馬仲達の台頭

おどろおどろしい、身の毛のぞ立つような
悪阻の儀式が執り行なわれるすこし前の
ことである(二四九)正月六日、魏国の帝
都日洛陽において、如勃発ある可重なる事
件(クーデター)が突如勃発した。
ことにたいして、
それは、洛陽中を揺るがし、中国史の流れを

定めた大きな事件であった。

*

2257 1/2
249 決起 (分かりにくい)

魏国の儀式の22の正始9年
(248年)

$1 \text{ 里} = 300 \text{ 步}$
 $1 \text{ 步} = 6 \text{ 尺}$
 $1 \text{ 尺} = 24,12 \text{ cm}$
 $1 \text{ 里} = 434 \text{ m}$
 $90 \text{ 里} = 39,074 \text{ km}$

珍邸

めんがく
免官 2178

三〇支(等) 1-278^下
全上左

2.256 P-2/2

三〇支(等) 1-278^上, 下

やうずうむが
三〇支(等) 1-279^上
小林 607

と戦おうともせず、ぐさぐさ^{ためらい}
決断^{けつだん}がつかないでいた。

■ そんなとき、
「潔く罪を認めれば、免官^{めんがん}だけです。」

浴水^{よくすい}にかけて誓^{ちか}ってもよいし

という仲達の意向^{いこう}が伝えられてきた。

■ 仲達が使者^{しや}として遣わした侍中の許允^{きょいん}と、

尚書の陳泰^{ちんたい}もまた、

「早く、自分のほうから罪^{つみ}に服^{ふく}したほうが

いいし

と曹爽^{そうそう}に進言^{しんげん}した。

■ 仲達の言葉^{ことば}を信じた曹爽^{そうそう}は、兵^{へい}を解^とき、許^{きょ}

允^{いん}と陳泰^{ちんたい}を仲達^{ちゅうだつ}のもとへ参上^{さんじやう}させ

「死罪^{しざい}にしてほしい」と

と嘆願^{たんげん}し、そのうえで、仲達^{ちゅうだつ}の上奏文^{じやうそうぶん}を天子^{てんし}

のもとに届^{とど}けた。

■ かくして曹爽兄弟^{そうそうけいだい}は罷免^{ひめん}され、諸侯^{しよこう}の資

格^{かく}で自宅^{いたく}へ帰還^{きかん}させられた。

■ 曹爽兄弟^{そうそうけいだい}は、仲達^{ちゅうだつ}の融通無碍^{ゆうつうむがい}な術策^{じゆさく}をよみ

とせず、自分^{いぶん}達は殺^{ころ}さし水^{みづ}にすむ、と思^{おも}い込^こ

か 斯く 正月10日 2255
三〇五 1-120 上、119 上 2236
三〇五 1-119 下 2257 P-1/2
279 上

こ 三〇五 1-279 上 2236
かえ 却つて 幸尾 223
三〇五 1-119 上

人だのだった。甘いのである。
だが、決起した仲達にしてみれば、この際
曹爽らを徹底的に叩きのめしておかなければ
却って恐ろしいことになる。
格別のご恩寵をこうむり、先帝(明帝)に
握って遺詔を授けられ、天下を託された。
その遺言をないがしろにして、なんと何晏、
鄧錫、および張当らとともに神器をねらおうと
企てた。桓範はこれら罪人に同調した。彼
らはみな、大逆無道の罪に相当する。
という判断が下された。
斯くて、正月十日、曹爽ら十名を逮捕して
ことごとく処刑し、三族(父母・妻子・兄弟
姉妹)を皆殺しにした。
正月十八日に、大赦を行なった。
宿敵曹爽を打倒した仲達は、権勢を手中に
収めた。
そして、夏四月八日、
年号が、
嘉平元年

H4, 2.9 (日)
H10, 9.19 (土)
H30(2018)6.5(火)~6.6(4回)
H31(2019)1.23(日)~1.23(3回)

せんたつ ね 926
基奉

2,257-3/2

せん(せう) ね 1267
禅譲
叛逆 ね 1833

こうねい ね 754
行年
喧く 1496

HIL

令和元(2019)6.30(日)~7.1(4回)
令和2(2020)2.8(土)~2.9(3回)
令和2(2020)10.22(木)~10.24(4回)

10/24
10/23

*

風社、二二三と五頁参照)
九、二八二頁。『三国志物語』寺尾善雄、光
(『三国志』(I)筑摩書房、一一九、二七七と
達は、篡奪者になりたくなかつた。
司馬懿(仲達)は、その仕事を子や孫に託
した。かつての曹操がそうであつたように。
『三国志』(I)筑摩書房、一一九、二七七と

と喧いた。
その実力をもつてすれば、魏王朝に曰禅譲
を迫ることも可能であらう。しかし、仲
達は、篡奪者になりたくなかつた。
死の直前、仲達は、
叛逆者にならずに済んでよかったし
八月五日に死んだ。行年七十三。

一、八月五日に死んだ。行年七十三。
なお、仲達は、約二年後の嘉平三年(二五
魏帝曹芳も、太傅である仲達の言いなりに
なるほかなかつたのであろう。

(二四九)に改められた。